

二十四節気

季夏	晩秋	旧暦六月	小暑	7月7日	大暑	7月22日
孟秋	初秋	旧暦七月	立秋	8月7日	処暑	8月23日
仲秋	中秋	旧暦八月	白露	9月7日	秋分	9月22日

聚楽懐古

摩島長弘(1791~1839)

恨望萋萋春草繁 恨望すれば 萋萋として 春草 繁し

無人芳樹護壞垣 人 無くして 芳樹 壞垣を護る

機声伊軋斜陽裏 機声 伊だ軋る 斜陽の裏

猶傍桃花織夢魂 猶ほ桃花に傍ひて 夢魂を織るがごとし

ジュラクカイコ。マシマ ナガヒロ。コンボウすれば サイサイとして シュンソウ
シゲし。ヒト ナくして ホウジュ カイエンをマモる。キセイ タダキシる シヤヨウ
のウチ、ナオ トウカにソいて ムコンをオるがごとし。

【注】○聚楽：聚楽第(じゅらくでい、じゅらくだい、じゅらくやしき)。天正十五年(1587)完成。文禄四年(1595)、豊臣秀次の死の直後に秀吉によって徹底的に破壊された。【参考】の『明史』の記載も参照。○摩島長弘：摩島助太郎。京都の漢詩人。○恨望：「怨望」「怨恨」に同じ。○機声：はたを織る音。○桃花：「安土桃山時代」の「桃山」(豊臣秀吉の居城だった伏見城の跡地は、江戸時代に「桃山」と呼ばれた)にかけた言葉。

遊石巻

伊達政宗(1567~1636)

青天涵碧海 青天 碧海を涵し

碧海接青天 碧海 青天に接す

海外更無海 海外 更に海 無く

向天莫問天 天に向ひ 天に問ふ莫し

イシノマキにアソぶ。ダテ マサムネ。セイテン ヘキカイにヒタし、ヘキカイ セイ
テンにセツす。カイガイ サラにウミ ナく、テンにムカイ、テンにトウナシ。

【注】○石巻：現在の宮城県石巻市。伊達政宗の命を受けてヨーロッパに向かった、支倉常長ら慶長使節の船は、石巻市月浦(つきのうら)から出帆した。

江村

杜甫(712~770)

清江一曲抱村流	清江 一曲 村を抱きて流る
長夏江村事事幽	長夏 江村 事に幽かなり
自来自来梁上燕	自ら去り自ら来る 梁上の燕
相親相近水中鷗	相ひ親しみ相ひ近づく 水中の鷗
老妻画紙為棋局	老妻 紙に画きて棋局と為し
稚子敲針作釣鉤	稚子 針を敲きて 釣鉤と作す
多病所須唯藥物	多病 須ふる所は唯だ藥物のみ
微軀此外更何求	微軀 此の外に更に何をか求めん

コウソン。トホ。セイコウ イツキョク ムラをイダきてナがる。チョウカ コウソン
 ジジにシズかなり。オノズカからサリ オノズカからキタる リョウジョウのつばめ、アイ
 シタしみアイチカづく スイチュウのカモメ。ロウサイ カミにエガきて キキョクとナ
 し、チシ ハリをタタきて チョウコウとナす。タビョウ モチうるトコロは ただヤク
 ブツのみ。ビク コのホカに サラにナニをかモトめん。

【注】○江村：川ぞいの村。この詩は西暦760年、杜甫四十九歳の夏、杜甫が成都郊外の「浣花溪」のほとりに「草堂」を建てたときの作。○長夏：日が長い夏の盛りを指す語。陰曆六月を指す場合もある。○梁上燕：はりのうえの、仲の良いつがいのツバメ。○水中鷗：川の青い水を背景にくっきりと見える白い水鳥。海のカモメではない。警戒心が強いはずの水鳥も、人間に近寄ってくるほど、のどかな田舎の光景。○棋局：碁盤。○多病所須唯藥物：『全唐詩』では「但有故人供禄米(但だ故人の禄米を供する有れば。ただコジンのロクマイをキョウするあれば)」に作る。

(jiang1 cun1. du4 fu3) qing1 jiang1 yil qu3 bao4 cun1 liu2, chang2 xia4 jiang1 cun1 shi4 shi4 you1. zhi4 qu4 zhi4 lai2 liang2 shang4 yan4. xiang4 qin1 xiang4 jin4 shui3 zhong1 ou1. lao3 qi1 hua4 zhi3 wei2 qi2 ju2. zhi4 zi3 qiao1 zhen1 zuo4 diao4 gou1. duo1 bing4 suo3 xu1 wei2 yao4 wu4. wei1 qu1 ci3 wai4 geng1 he2 qiu29 c.

倦夜

杜甫

竹涼侵臥内	竹涼は臥内を侵し
野月滿庭隅	野月は庭隅に満つ
重露成涓滴	重露 涓滴を成し
稀星乍有無	稀星 乍ちに有無
暗飛螢自照	暗きに飛ぶ螢は自ら照し
水宿鳥相呼	水に宿る鳥は相呼ぶ
万事干戈裏	万事は干戈の裏
空悲清夜徂	空しく悲しむ 清夜の徂くを

ケンヤ。トホ。チクリヨウはガダイをオカシ、ヤゲツはテイグウにミツ。チヨウロはケンテキをナシ、キセイはタチマチにウム。クラきにトボホタルはミズからテラシ、ミズにヤドルトリはアイヨボ。バンジはカンカのウチ、ムナしくカナシむ。セイヤのユクを。

【注】西暦764年、杜甫が五十三歳の初秋、草堂で詠んだ五言律詩。安史の乱(755〜763)の余波で、当時は各地でまだ騒乱が多発していた。○倦夜：倦怠感で寝付かれない夜。○竹涼：竹林の涼気。○侵臥内：寢床の中にまで侵入して来る。○涓滴：水の小さなしずく。首句の「竹」と対応する。○稀星：まばらにしか見えない星。第二句の「月」と対応する。○乍有無：月の光の増減によって、まばらな小さな星がかすれて見えたり、見えなくなったりする。○干戈：タテとホコ。転じて、武器全般や戦争を指す。ここでは、天下の戦乱が依然として続いていることを指す。

(juan4 ye4 du4 fu3) zhu2 liang2 qin1 wo4 nei4, ye3 yue4 man3 ting2 yu2。 chong2 lu4 cheng2
juan1 di1, xi1 xing1 zha4 you3 wu2。 an4 fei1 ying2 zi4 zha4, shui3 su4 niao3 xiang4 hu1。
wan4 shi4 gan1 gei1 li3, kong1 bei1 qing1 ye4 cu2。

石の香や夏草赤く露暑し 松尾芭蕉(1644〜1694)

妙雲寺観瀑

夏目漱石(1867〜1916)

蕭條古刹倚崔嵬 蕭条たる古刹 崔嵬に倚る
溪口無僧坐石苔 溪口 僧の石苔に坐する無し
山上白雲明月夜 山上の白雲 明月の夜
直為銀蟾仏前來 直ちに銀蟾と為りて 仏前に來たる

ミョウウンジにてタキをミル。ナツメソウセキ。シヨウジヨウたるコサツ、サイカイにヨル。ケイコウ ソウのセキタイにザするナシ。サンジヨウのハクウン メイゲツのヨル、タダちにギンボウとナリて ブツゼンにキたる。

【注】○妙雲寺：栃木県那須塩原市にある寺。「常楽の瀧」がある。大正元年(1912)八月、漱石は避暑のため塩原に遊んだ。現在、妙雲寺にこの漢詩を記した石碑がある。「湯壺から首丈出せば野菊哉」という句碑もある。○崔嵬：岩や石がごろごろ重なっている。○銀蟾：銀色のウワバミ、大きな蛇。

【参考】『明史』「日本伝」より、豊臣秀吉の条

日本故有王、其下称関白者最尊、時以山城州渠信長為之。偶出獵、遇一人臥樹下。驚起衝突。執而詰之。自言「為平秀吉、薩摩州人之奴」。雄健蹻捷、有口弁。信長悅之、令牧馬、名曰「木下人」。後漸用事、為信長画策、奪並二十余州、遂為摂津鎮守大将。

日本にはもと王あり、そのしたに関白と称する者ありて最も尊し。時に山城州のかしら、

信長をもつてこれと為す。たまたま獵にいで、一人の樹下にガするものにあう。驚起して衝突す。とらえてこれをなじる。みずから言う「たいらの秀吉、薩摩州の人のやつことたり」と。ユウケンキョウシヨウにして口弁あり。信長、これをよるこび、馬をボクせしめ、名づけて「木下人」という。のちによく事をうう。信長のために画策し、二十余州をあわす。ついに摂津の鎮守大将となる。

有参謀阿奇支者、得罪信長。命秀吉統兵討之。俄信長為其下明智所殺、秀吉方攻滅阿奇支、聞變、与部将行長等乘勝還兵誅之。威名益振。尋廢信長参子、僭称関白、尽有其衆、時為万曆十四年。

参謀のアケチなるものあり、罪を信長に得たり。秀吉に命じて兵をすべ、これを討たしむ。にわかにして信長、そのしもの明智の殺すところとなる。秀吉、まさにアケチを攻め滅ぼす。ヘンを聞き、部将の行長らと勝ちに乘じて兵をかえしてこれをチュウす。威名ますますふるう。ついで信長の三子を廢し、関白をセンシヨウし、ことごとくその衆をユウす。ときにバンレキ十四年なり。

於是益治兵、征服六十六州、又以威脅琉球、呂宋、暹羅、仏郎機諸国、皆使奉貢。乃改国王所居山城為大閣、広築城郭、建宮殿。其樓閣有至九重者、実婦女珍宝其中。其用法嚴、軍行有進無退、違者雖子婿必誅、以故所向無敵。

ここにおいてますます兵をおさめ、六十六州を征服し、また威をもつてリュウキユウ、ルソン、シヤム、フランキの諸国をおびやかし、みなホウコウせしむ。すなわち国王のおるところの山城を改めてタイコウをつくり、広くジョウウカクをきずき、宮殿をたつ。そのロウカク九重にいたるものありて、フジヨチンポウをそのうちにみたく。その法をもちうるにゲン、グンコウはすすむ有りてしりぞくこと無し。たがうものはシセイといえどもかならずチュウす。ゆえをもつて、むかうところ敵なし。

乃改元文禄、並欲侵中国、滅朝鮮而有之。

すなわち文禄と改元し、ならびに中国をおかし、朝鮮を滅ぼしてこれをユウせんとはつす。(以下略)

【参考】朝鮮の李瀾(1681~1763)『星湖僊説』における豊臣秀吉評

以此觀之、秀吉亦有許大力量、非庸人也。起自島夷、越海与大邦作仇、其勢必敗。若使生於中国恣行其胸臆、未必不成。(此を以て之を觀るに、秀吉亦た許大の力量有り、庸人に非ざるなり。島夷より起ちて、海を越えて大邦と仇を作せば、其の勢ひとして必ず敗れん。若し中国に生まれて其の胸臆を恣に行はしめば、未だ必ずしも成さずんばあらじ) このこと(秀吉が、明国人である許儀後のスパイ活動の罪を許したこと)から考えると、秀吉もかなりの力量をもつ、非凡な人物であったことがわかる。小さな島国の蛮族から身を起こし、海を渡って大国と戦争をすれば、負けるのも必然である。もし秀吉が、中国に生まれて自分の胸の思いを存分に行うことができたら、ひよつとして世界征服に成功していたかもしれない。